

アバール語の再帰代名詞について*

山田 久 就

1 始めに

再帰代名詞の分布は、理論言語学の中心的なトピックの一つである。世界の諸言語の再帰代名詞は、ある共通性を保ちながらも、かなり違った分布を持っている。本稿の目的は、アバール語の再帰代名詞zhi-、zhi- -goの分布を記述するとともに理論的な観点から考察することである。アバール語の統語論は全般的にあまり研究が行われていないが、再帰代名詞に関してはほとんど研究がなされていない。

アバール語は、絶対格・能格型の格配列を持つ言語の一つである。本稿ではDixon (1979, 1994)の用語S、A、Oを用いるが、アバール語のような絶対格・能格型の格配列を持つ言語ではSとOが絶対格で、Aが能格で現われる¹⁾。一方、日本語のような主格・対格型の格配列を持つ言語では、SとAが主格で、Oが対格で現われる。S、A、Oと格配列の関係を簡単に図式化すると次のようになる。

- (1) 絶対格・能格： 能格 絶対格
- | | | |
|---------|----|----|
| | ^ | |
| A | S | O |
| | v | |
| 主格・対格型： | 主格 | 対格 |

アバール語の格配列を例示する。(2)は自動詞文で、SのMusaが絶対格で現われている。(3)は他動詞文で、AのRasulが能格で、OのMusaが絶対格で現われている。

- (2) Musa haniwe wach'ana.
 Musa・ABS ここに 来る・PST
 「Musaがここに来た。」

- (3) Rasulitsa Musa haniwe wachana.
 Rasul · ERG Musa · ABS ここに 連れて来る · PST
 「RasulがMusaをここに連れて来た。」

再帰代名詞の分布を議論する上での一つのトピックに斜格経験者述語(*oblique experiencer predicates*)がある。アバール語の自動詞の中にも斜格経験者述語がいくつかある。-otɬ'ize (好く、欲する)などの述語では経験者(*experiencer*)が与格で現われ、-içize (見る、見える)、rafiže (聞く、聞こえる)、ɬaze (知る)、-ich'ch'ize (わかる)、rak'alde kkeze (思う)、rixine (嫌う)、ch'alfiŋe (飽きる)などの述語では経験者が位格Iで現われる。被経験者(*experiencee*)は常に絶対格で現われる。(4)は経験者が与格で現われている例であり、(5)は経験者が位格Iで現われている例である。

- (4) ʕalie Pat'imat jott'ula.
 Ali · DAT Patimat · ABS 好いている · PRS
 「AliがPatimatを好いている。」

- (5) ʕalida Pat'imat jiçana.
 Ali · LOC(I) Patimat · ABS 見る／見える · PST
 「AliがPatimatを見た。／AliにPatimatが見えた。」

本稿の構成は、次の通りである。第2節で再帰代名詞*zhi-*の分布を、第3節で再帰代名詞*zhi-* *-go*の分布を局所性(*locality*)、人称、統語的位置の観点から考察する。そして、第4節でまとめを行う。

2 *zhi-*

この節では、再帰代名詞*zhi-*について論じていく。

2.1

*zhi-*には、局所性に関して次の制約がある。

- (6) *zhi-*は同一の節にある名詞句を先行詞にできない。

(7)は、*zhi-*が同一の節にある名詞句を先行詞にしている、容認されない文である。それに対して、(8)は、*zhi-*が異なる節にある名詞句を先行詞にしている、容認される文である。

- (7) *Musa_i zhindir_i wasasukx balahana.
 Musa · ABS 自分 · GEN 息子 · LOC(II) 見る · PST
 「*Musa_iが自分_iの息子を見た。」

- (8) Musa_i zhinda_i k'aʔalew wasasukx balahana.
 Musa · ABS 自分 · LOC(I) 話す · AdjPt,PRS 男の子 · LOC(II) 見る · PST
 「Musa_iが自分_iに話している男の子を見た。」

上の(8)では、zhi-を間接的に支配(dominate)している文によって直接的に支配されている名詞句がzhi-の先行詞になっているが、zhi-とその先行詞がこのような環境にない場合、文は容認されない。制約(6)をより厳密にすると、制約(9)のようになる²。

- (9) zhi-の先行詞はzhi-を間接的に支配している文によって直接的に支配されている名詞句でなくてはならない。

zhi-の先行詞には、人称に関して次のような制約がある。

- (10) zhi-は一人称、二人称の代名詞を先行詞にできない。

(11) では、zhi-を用いることはできず、一人称の代名詞が用いられる。

- (11) Dun_i dida_i/*zhinda_i k'aʔalew wasasukx
 私 · ABS 私/自分 · LOC(I) 話す · AdjPt,PRS 男の子 · LOC(II)
 balahana.
 見る · PST
 「私_iが私_i/*自分_iに話している男の子を見た。」

2.2

zhi-の先行詞が現れることができる統語的位置に関しては次の制約があると思われる。

- (12) zhi-の先行詞はS (絶対格)、A (能格)、斜格経験者述語の経験者 (与格、位格I) のいずれかでなくてはならない。

このことを例示していく。先に示した(8)と下の(13)、(14)は、自動詞文である。(8)では、S (絶対格) がzhi-の先行詞になっている。それに対して、(13)、(14)では、S (絶対格) 以外のアクタントがzhi-の先行詞になっている³。(7)は容認される文であるが、(13)、(14)は容認されない文である。

- (13) *Musakxe_i zhinda_i łalarew
 Musa · ALL(II) 自分 · LOC(I) 知る · AdjPt,PRS,NEG
 chi wach'ana.
 人 · ABS 来る · PST
 「*Musa_iの所に自分_iが知らない人が来た。」

- (14) *Musada_i ask'oj zhiw_i rixaraj
 Musa · LOC(I) そばに 自分 · ABS 嫌う · AdjPt,PST
 jas řodoj ch'ana.
 女の子 · ABS 座る · PST
 「*Musa_iのそばに自分_iを嫌っている女の子が座った。」

次の(15)-(19)は、全て他動詞文である。(15)では、A（能格）がzhi-の先行詞になっている。(16)、(17)では、O（絶対格）がzhi-の先行詞になっている。(18)、(19)では、A（能格）、O（絶対格）以外のアクタントがzhi-の先行詞になっている。(15)は容認される文であるが、(16)-(19)は容認されない文である。

- (15) Musatsa_i zhindie_i tı'ural sualaze
 Musa · ERG 自分 · DAT 与える · AdjPt,PST 質問 · PL,DAT
 zhawab tı'una.
 答え · ABS 与える · PST
 「Musa_iが^s（誰かが）自分_iに与えた質問に答えた。」

- (16) *Ditsa Musa_i zhiw_i hawurab
 私 · ERG Musa · ABS 自分 · ABS 生まれる · AdjPt,PST
 bak'alde wachana.
 場所 · ALL(I) 連れて行く · PST
 「*私^sがMusa_iを自分_iが生まれた場所に連れて行った。」

- (17) *Musa_i zhintsa_i gukkaraw wasas
 Musa · ABS 自分 · ERG だます · AdjPt,PST 男の子 · ERG
 ch'wana.
 殺す · PST
 「*Musa_iを自分_iがだました男の子が殺した。」

- (18) *Musae_i zhinda_i łalarew
 Musa · DAT 自分 · LOC(I) 知っている · AdjPt,PRS,NEG
 chijas łarats łłuna.
 人 · ERG お金 · ABS 与える · PST
 「*Musa_iに自分_iが知らない人がお金を与えた。」

- (19)*Ditsa Musadasa_i zhintsai kxwarab
 私 · ERG Musa · ABL(I) 自分 · ERG 書く · AdjPt,PST
 kayat baxchana.
 手紙 · ABS 隠す · PST
 「私はMusa_iから自分_iが書いた手紙を隠した。」

下の(20)、(21)は、与格経験者述語文である。(20)では、経験者（与格）がzhi-の先行詞になっている。(21)では、被経験者（絶対格）がzhi-の先行詞になっている。(20)は容認される文であるが、(21)は容認されない文である。

- (20)Musae_i zhinda_i k'ałalew was
 Musa · DAT 自分 · LOC(I) 話す · AdjPt,PRS 男の子 · ABS
 wotł'ularo.
 好いている · PRS,NEG
 「Musa_iが自分_iに話している男の子を好いていない。」

- (21)*Musa_i zhinda_i łalarej
 Musa · ABS 自分 · LOC(I) 知っている · AdjPt,PRS,NEG
 jasałe wotł'ula.
 女の子 · DAT 好いている · PRS
 「*Musa_iを自分_iが知らない女の子が好いている。」

下の(22)、(23)は、位格I経験者述語文である。(22)では、経験者（位格I）がzhi-の先行詞になっている。(23)では、被経験者（絶対格）がzhi-の先行詞になっている。(22)は容認される文であるが、(23)は容認されない文である。

- (22) Musada_i zhinda_i aburab zho
 Musa · LOC(I) 自分 · LOC(I) 言う · AdjPt,PST こと · ABS
 rałularo.
 聞こえる · PRS,NEG

「Musa_iに（誰かが）自分_iに言ったことが聞こえない。」

- (23)*Musa_i zhindie_i jot1'ulej
 Musa_i・ABS 自分_i・DAT 好いている・AdjPt,PRS
 jasalda ɬalaro.
 女の子・LOC(I) 知っている・PRS,NEG
 「*Musa_iを自分_iが好いている女の子が知らない。」

以上、zhi-には(12)=(24)の制約があることを例示した。

- (24) zhi-の先行詞はS（絶対格）、A（能格）、斜格経験者述語の経験者（与格、位格I）のいずれかでなくてはならない。

制約(24)はかなり記述的な形の制約である。制約(24)をより理論的な形で書き直すことを試みると、下に示す制約(25)に書き直すことができると筆者は考える。

- (25) zhi-の先行詞は論理主語でなくてはならない。

論理主語は次のように定義する。

- (26) 論理主語とは、節のアクタントの中で、意味役割の階層において最も高い位置にある意味役割を担っているアクタントである。

意味役割とは、動詞など主要部によって（あるいは、節によって）表される状況に対してアクタントの指示対象が持っている役割（あるいは、働き）を抽象化し、いくつかに分類した意味統語的な範疇である⁴。どのような意味役割を設定すべきかという問題には、いろいろと異なった提案がある。一般的には、主な意味役割として、動作主(agent)、被動者(patient)、主題(theme)、受け手(recipient)、経験者(experiencer)、道具(instrument)、着点(goal)、起点(source)、場所(location)などが設定されている。意味役割は優位性において階層をなしていると考えられている⁵。本稿では、基本的にBresnan and Kanerva (1989)に従った形で、次の(27)の意味役割の階層を仮定してみる。

- (27) 動作主 > 経験者、受け手 > 道具 > 被動者、主題、被経験者 > 位置、着点、起点

この意味役割の階層をもとに論理主語を考えてみると、自動詞節ではS（絶対格）が、他動詞節ではA（能格）が、斜格経験者述語節では経験者（与格、位格I）が論理主語となる。

3 zhi- -go

この節では、再帰代名詞zhi- -goについて考察する。zhi- -goは、前節で扱ったzhi-に接辞-goが加わった表現形式である。接辞-goは強調を表わす一般的な接辞であり、いろいろな品詞の単語に付加される。

3.1

再帰代名詞zhi- -goは、(28)が示すように、再帰代名詞zhi-と同様に、異なる節にある名詞句を先行詞にすることができるのと同時に、(29)が示すように、再帰代名詞zhi-と違って、同一の節にある名詞句を先行詞にすることもできる。

- (28) Musa_i zhindago_i k'atalew
 Musa · ABS 自分自身 · LOC(I) 話す · AdjPt,PRS
 wasasukx balahana.
 男の子 · LOC(II) 見る · PST
 「Musa_iが自分自身_iに話している男の子を見た。」

- (29) Musa_i zhindirgo_i wasasukx balahana.
 Musa · ABS 自分 · GEN 息子 · LOC(II) 見る · PST
 「Musa_iが自分_iの息子を見た。」

zhi- -goは、再帰代名詞として用いられる他に、(30)のように、「～自身」の意味で用いられる。

- (30) Musatsa zhintsago Pat'imatie kumek habuna.
 Musa · ERG 自身 · ERG Patimat · DAT 手伝い · ABS する · PST
 「Musa自身がPatimatを手伝った。」

「～自身」の意味で用いられているzhi- -goは、zhi- -goが修飾している名詞句と同じ格で現れる。上の(30)では、zhi- -go (～自身) が能格名詞句を修飾していて、zhi- -go (～自身) も能格で現れている。zhi- -go (～自身) の語順は基本的に自由であるが、修飾する名詞句のすぐ後ろに現れることが多い。

再帰代名詞zhi- -goも、再帰代名詞zhi-と同様に、一人称、二人称の代名詞を先行詞にすることができない。一人称、二人称の代名詞に接辞-goの付いた表現形式が用いられる。(31)は、代名詞が接辞-goを伴う一人称代名詞である場合には容認されるが、代名詞が接辞-goを伴わない一人称代名詞やzhi- -goである場合には容認されない。

- (31) Dun_i dirgo_i/ *dir_i/ *zhindirgo_i wasasukx balahana.
私・ABS 私/私/自分・GEN 息子・LOC(II) 見る・PST
「私_iが私_i/私_i/*私_i/*自分_iの息子を見た。」

「～自身」の意味でのzhi- -goも一人称、二人称の代名詞を修飾することができない。代わりに(32)のように接辞-goを伴った一人称、二人称の代名詞が用いられる。

- (32) Ditsa ditsago Pat'imatie kumek habuna.
私・ERG 自身・ERG Patimat・DAT 手伝い・ABS する・PST
「私自身がPatimatを手伝った。」

3.2

zhi- -goの先行詞が現れることができる統語的位置に関する制約は、zhi- -goが同一の節にある名詞句を先行詞にしている場合とzhi- -goが異なる節にある名詞句を先行詞にしている場合で違いがある。ここではzhi- -goが同一の節にある名詞句を先行詞にしている場合について述べる。zhi- -goが異なる節にある名詞句を先行詞にしている場合については、3.5で扱う。zhi- -goが同一の節にある名詞句を先行詞にしている場合、zhi- -goの先行詞が現れることができる統語的位置に関して次のような制約があると思われる。

- (33) zhi- -goの先行詞はS（絶対格）、A（能格）、O（絶対格）、斜格経験者述語の経験者（与格、位格I）と被経験者（絶対格）のいずれかでなくてはならない。

この制約を例文を用いて示していく。先に示した(29)と(34)-(36)は、自動詞文である。(29)、(34)では、S（絶対格）がzhi- -goの先行詞になっている。それに対して、(35)、(36)では、S（絶対格）以外のアクタントがzhi- -goの先行詞になっている。(29)、(34)は容認される文であるが、(35)、(36)は容認されない文である。

- (34) Musa_i zhindirgo_i wasasde wayana.
Musa・ABS 自分・GEN 息子・ALL(I) 叱る・PST
「Musa_iが自分_iの息子を叱った。」

- (35) *Musade_i zhindirgo_i emen wayana.
Musa・ALL(I) 自分・GEN 父・ABS 叱る・PST
「*Musa_iを自分_iの父が叱った。」

- (36) *Musakxe_i zhindirgo_i hudul wach'ana.
Musa · ALL(II) 自分 · GEN 友達 · ABS 来る · PST
[*Musa_iの所に自分_iの友達が来た。]

下の(37)-(42)は、全て他動詞文である。(37)、(38)では、A (能格) がzhi- goの先行詞になっている。(39)、(40)では、O (絶対格) がzhi- goの先行詞になっている。(41)、(42)では、A (能格)、O (絶対格) 以外のアクタントがzhi- goの先行詞になっている。(37)、(38)と(39)、(40)は容認される文であるが、(41)、(42)は容認されない文である。

- (37) Musatsa_i zhindirgo_i wats gukkana.
Musa · ERG 自分 · GEN 兄 (弟) · ABS だます · PST
[Musa_iが自分_iの兄 (弟) をだました。]

- (38) Musatsa_i zhindirgo_i insue kumek habuna.
Musa · ERG 自分 · GEN 父 · DAT 手伝い · ABS する · PST
[Musa_iが自分_iの父を手伝った。]

- (39) Musa_i zhindirgo_i watsas gukkana.
Musa · ABS 自分 · GEN 兄 (弟) · ERG だます · PST
[Musa_iを自分_iの兄 (弟) がだました。]

- (40) Ditsa Musa_i zhindirgo_i rokk'ow ch'wana.
私 · ERG Musa · ABS 自分 · GEN 家 · LOC(V) 殺す · PST
[私はMusa_iを自分_iの家で殺した。]

- (41) *Musae_i zhindirgo_i insutsa kumek habuna.
Musa · DAT 自分 · GEN 父 · ERG 手伝い · ABS する · PST
[*Musa_iを自分_iの父が手伝った。]

- (42) *Musakxe_i zhindirgo_i hudulas kayat kxwana.
Musa · ALL(II) 自分 · GEN 友達 · ERG 手紙 · ABS 書く · PST
[*Musa_iに自分_iの友達が手紙を書いた。]

次の(43)、(44)は、与格経験者述語文である。(43)では、経験者 (与格) がzhi- goの先行詞になっている。(44)では、被経験者 (絶対格) がzhi- goの先行詞に

なっている。(43)と(44)はともに容認される文である。

(43) Musae_i zhindirgo_i was wotɪ'ula.
 Musa · DAT 自分 · GEN 息子 · ABS 好いている · PRS
 「Musa_iが自分_iの息子を好いている。」

(44) Musa_i zhindirgo_i insue wotɪ'ula.
 Musa · ABS 自分 · GEN 父 · DAT 好いている · PRS
 「Musa_iを自分_iの父が好いている。」

下の(45)、(46)は、位格I経験者述語文である。(45)では、経験者(位格I)が zhi- -goの先行詞になっている。(46)では、被経験者(絶対格)が zhi- -goの先行詞になっている。(45)と(46)はともに容認される文である。

(45) Musada_i zhindirgo_i was wiçana.
 Musa · LOC(I) 自分 · GEN 息子 · ABS 見る · PST
 「Musa_iが自分_iの息子を見た。/Musa_iに自分_iの息子が見えた。」

(46) Musa_i zhindirgo_i wasasda wiçana.
 Musa · ABS 自分 · GEN 息子 · LOC(I) 見る · PST
 「Musa_iを自分_iの息子が見た。/Musa_iが自分_iの息子に見えた。」

以上、(29)と(34)-(46)を用いて、zhi- -goとその先行詞が同一の節にある場合、zhi- -goには(33)=(47)の制約があることを示した。

(47) zhi- -goの先行詞はS(絶対格)、A(能格)、O(絶対格)、斜格経験者述語の経験者(与格、位格I)と被経験者(絶対格)のいずれかでなくてはならない。

制約(47)はかなり記述的な形の制約である。制約(47)をより理論的な形で書き直すことを試みると、下に示す制約(48)に書き直すことができると筆者は考える。

(48) zhi- -goの先行詞は、文法主語か論理主語でなくてはならない。

論理主語についてはすでに述べているので、ここでは、文法主語について説明する。文法主語は、文法関係という範疇の構成要素である。文法関係とは、基本的に格などの形態的表示と結びついている形態統語的な範疇である。文法関係は、主要な文法関係と二次的な文法関係に分けられる。主要な文法関係は文法主語と文法主語以外の主要な文法関係(非文法主語と呼ぶことにする)に

下位区分される。筆者は、アバール語に関して、自動詞節のS（絶対格）、他動詞節のO（絶対格）、斜格経験者述語節の被経験者（絶対格）を文法主語、他動詞節のA（能格）を非文法主語、斜格経験者（与格、位格I）を含むそれ以外のアクタントを二次的な文法関係と考える^{6,7}。

S（絶対格）、A（能格）、斜格経験者述語節の経験者（与格、位格I）が論理主語であり、S（絶対格）、O（絶対格）、斜格経験者述語節の被経験者（絶対格）が文法主語であるから、論理主語という概念と文法主語という概念を用いて制約(47)を書き直すと上に示したように制約(48)になる。

3.3

(33)に示したように、他動詞節のA（能格）とO（絶対格）はともにzhi- -goの先行詞になることができる。また、斜格経験者述語節の経験者（与格、位格I）と被経験者（絶対格）はともにzhi- -goの先行詞になることができる。ここで、他動詞節のA（能格）とO（絶対格）、斜格経験者述語節の経験者（与格、位格I）と被経験者（絶対格）の一方がzhi- -goで、他方がその先行詞になっている文について考える。

下の(49a)では、A（能格）がO（絶対格）の位置にあるzhi- -goの先行詞になっている。(49b)では、反対に、O（絶対格）がA（能格）の位置にあるzhi- -goの先行詞になっている。(49a)は完全に容認される文である。それに対して、(49b)に関しては、全く容認しないインフォーマントとごちないとしながらも容認するインフォーマントがいる。

(49) a. Musatsa_i zhiwgo_i ʔukx'ana.
Musa · ERG 自分 · ABS 傷つける · PST
「Musa_iが自分_iを傷つけた。」

b. ⁷/*Musa_i zhintsago_i ʔukx'ana.
Musa · ABS 自分 · ERG 傷つける · PST
「⁷/*Musa_iを自分_iが傷つけた。」

次の(50a)では、zhi- -goが被経験者（絶対格）の位置にあり、経験者（与格）がzhi- -goの先行詞になっている。(50b)では、反対に、zhi- -goが経験者（与格）の位置にあり、被経験者（絶対格）がzhi- -goの先行詞になっている。(50a)は完全に容認される文である。それに対して、(50b)に関しては、全く容認しないインフォーマントとごちないとしながらも容認するインフォーマントがいる。

- (50) a. Musae_i zhiwgo_i wot¹'ula.
 Musa · DAT 自分 · ABS 好いている · PRT
 「Musa_iが自分_iを好いている。」
- b. ²/*Musa_i zhindiego_i wot¹'ula.
 Musa · ABS 自分 · DAT 好いている · PRT
 「²/*Musa_iを自分_iが好いている。」

下の(51a)では、zhi- -goが被経験者（絶対格）の位置にあり、経験者（位格I）がzhi- -goの先行詞になっている。(51b)では、反対に、zhi- -goが経験者（位格I）の位置にあり、被経験者（絶対格）がzhi- -goの先行詞になっている。(51a)は完全に容認される文である。それに対して、(51b)に関しては、全く容認しないインフォーマントとごちないとしながらも容認するインフォーマントがいる。

- (51) a. Musada_i zhiwgo_i ch'alfana.
 Musa · LOC(I) 自分 · ABS 飽きる · PST
 「Musa_iが自分_iに飽きた。」
- b. ²/*Musa_i zhindago_i ch'alfana.
 Musa · ABS 自分 · LOC(I) 飽きる · PST
 「²/*Musa_iに自分_iが飽きた。」

3.4

再帰代名詞としてのzhi- -goの先行詞を「～自身」の意味でのzhi- -goが修飾している文について論じる。(52)のような文である。

- (52) Musatsa_i zhintsago zhindago_i hedin abuna.
 Musa · ERG 自身 · ERG 自分 · LOC(I) そのように言う · PST
 「Musa_i自身が自分_iにそのように言った。」

この場合、「～自身」の意味でのzhi- -goは再帰代名詞としてのzhi- -goの直前に現れるのが一般的である。ここでも、他動詞節のA（能格）とO（絶対格）、斜格経験者述語節の経験者（与格、位格I）と被経験者（絶対格）の一方がzhi- -goで、他方がその先行詞になっている文について考える。

下の(53a)では、A（能格）がO（絶対格）の位置にあるzhi- -goの先行詞になっている。(53b)では、反対に、O（絶対格）がA（能格）の位置にあるzhi- -go

の先行詞になっている。(53a)と(53b)はともに容認される文であるが、よく用いられるのは(53b)の方である。

(53) a. Musatsa_i zhintsago zhiwgo_i łukx'ana.
 Musa · ERG 自身 · ERG 自分 · ABS 傷つける · PST
 「Musa_i自身が自分_iを傷つけた。」

b. Musa_i zhiwgo zhintsago_i łukx'ana.
 Musa · ABS 自身 · ABS 自分 · ERG 傷つける · PST
 「Musa_i自身を自分_iが傷つけた。」

次の(54a)では、経験者（与格）が被経験者（絶対格）の位置にあるzhi- -goの先行詞になっている。(54b)では、反対に、被経験者（絶対格）が経験者（与格）の位置にあるzhi- -goの先行詞になっている。(54a)と(54b)はともに容認される文であるが、よく用いられるのは(54b)の方である。

(54) a. Musae_i zhindiego zhiwgo_i wott'ula.
 Musa · DAT 自身 · DAT 自分 · ABS 好いている · PRS
 「Musa_i自身が自分_iを好いている。」

b. Musa_i zhiwgo zhindiego_i wott'ula.
 Musa · ABS 自身 · ABS 自分 · DAT 好いている · PRS
 「Musa_i自身を自分_iが好いている。」

下の(55a)では、経験者（位格I）が被経験者（絶対格）の位置にあるzhi- -goの先行詞になっている。(55b)では、反対に、被経験者（絶対格）が経験者（与格）の位置にあるzhi- -goの先行詞になっている。(55a)と(55b)はともに容認される文であるが、よく用いられるのは(55b)の方である。

(55) a. Musada_i zhindago zhiwgo_i ch'alšana.
 Musa · LOC(I) 自身 · LOC(I) 自分 · ABS 飽きる · PST
 「Musa_i自身が自分_iに飽きた。」

b. Musa_i zhiwgo zhindago_i ch'alšana.
 Musa · ABS 自身 · ABS 自分 · LOC(I) 飽きる · PST
 「Musa_i自身に自分_iが飽きた。」

3.5

ここまでは、zhi- -goの先行詞がzhi- -goと同一の節にある場合について論じたが、ここでは、zhi- -goが異なる節にある名詞句を先行詞にしている場合について述べる。zhi- -goが異なる節にある名詞句を先行詞にしている場合、zhi- -goの先行詞が現れることができる統語的位置には、基本的に制限がない。zhi- -goの先行詞はいろいろな統語的位置に現れることができる。

(56)ではS(絶対格)がzhi- -goの先行詞になっていて、(57)ではA(能格)がzhi- -goの先行詞になっている。また、(58)では他動詞節の与格名詞句がzhi- -goの先行詞になっている。

- (56) Musa_i zhindago_i k'ałalew
 Musa · ABS 自分自身 · LOC(I) 話す · AdjPt,PRS
 wasasukx balahana.
 男の子 · LOC(II) 見る · PST
 「Musa_iが自分自身_iに話している男の子を見た。」

- (57) Musatsa_i zhindiego_i tɬ'ural
 Musa · ERG 自分自身 · DAT 与える · AdjPt,PST
 sualaze zhawab tɬ'una.
 質問 · PL,DAT 答え · ABS 与える · PST
 「Musa_iが(誰かが)自分自身_iに与えた質問に答えた。」

- (58) Musae_i zhindago_i łalarew
 Musa · DAT 自分自身 · LOC(I) 知っている · AdjPt,PRS,NEG
 chijas łarats tɬ'una.
 人 · ERG お金 · ABS 与える · PST
 「Musa_iに自分自身_iが知らない人がお金を与えた。」

(56)、(57)のzhi- -goは再帰代名詞のzhi- -goかもしれないが、(58)のzhi- -goは、代名詞ではなく、「～自身」の意味で代名詞を修飾している要素であり、代名詞自身は省略されている(生成文法でのゼロ代名詞である)と、筆者は考えている。

参考に述べると、次に示すように、再帰代名詞zhi-は「～自身」の意味でのzhi- -goで修飾することができないが、指示代名詞he- (その人、それ)は「～自身」の意味でのzhi- -goで修飾することができる。

- (59) Musa_i *zhinda_i zhindago/ hesda_i zhindago
 Musa · ABS 自分 自身/その人 自身 · LOC(I)
 k'aɪalew wasasukx balahana.
 話す · AdjPt,PRS 男の子 · LOC(II) 見る · PST
 「Musa_iが*自分_i自身/その人_i自身に話している男の子を見た。」

4 終わりに

本稿では、アバール語の再帰代名詞zhi-、zhi- -goの分布を考察した。まとめると次のようになる。第一に、zhi-とzhi- -goは、一人称、二人称の代名詞を先行詞に取れない。次に、zhi-、zhi- -goの先行詞が現われることができる統語的

(60)

	同一の節		異なる節	
	zhi-	zhi- -go	zhi-	zhi- -go
S (絶対格)	NO	OK	OK	OK
A (能格)	NO	OK	OK	OK
O (絶対格)	NO	OK	NO	OK
与格・位格I 経験者	NO	OK	OK	OK
主格被経験者	NO	OK	NO	OK
その他	NO	OK	NO	OK

位置は次の表にまとめることができる。

本稿では、zhi-とその先行詞が異なる節にある場合にzhi-の先行詞になることができる名詞句、すなわちS (絶対格)、A (能格)、斜格経験者述語の経験者 (与格、位格I) を論理主語として理論的に一般化した。そして、zhi- -goとその先行詞が同一の節にある場合にzhi- -goの先行詞になることができる名詞句、すなわちS (絶対格)、A (能格)、O (絶対格)、斜格経験者述語の経験者 (与格、位格I) と被経験者 (絶対格) を論理主語か文法主語であると理論的に一般化した。

注

* 本稿は日本語学会第117回大会で発表した内容(山田1998c)の一部に加筆と修正を施したものである。安井泉先生に草稿に対して貴重なお助言をいただいた。ここにお礼を申し上げたい。アバール語は、北東コーカサス諸語(ダゲスタン諸語)の一言語で、主にロシア連邦ダゲスタン共和国で話されている。アバール語の文語で用いられている文字はキリル文字であるが、本稿ではラテン文字へ次のような転写を行って、アバール語を表記している。a: a, б: b, в: w, г: g, гъ: ɣ, гь: h, гI: ʕ, д: d, е: e, ж: zh, з: z, и: i, й: j, к: k, къ: kx', къ: tʃ', кI: k', л: l, ль: ʎ, м: m, н: n, о: o, п: p, р: r, с: s, т: t, тI: t', у: u, ф: f, х: x, хъ: kx, хь: ɟ, хI: ɥ, ц: ts, ч: ch, ш: sh, ш: shch, э: e, ю: ju, я: ja。本稿のデータは1996年8月から1998年2月の間と1998年の8月にロシア連邦ダゲスタン共和国で行った調査による。S.D.S.氏、X.M.D.氏、I.I.M.氏を中心に多くの方にアバール語のインフォーマントになっていただいた。ここで感謝の意を申し上げたい。本稿で用いる省略記号は次の通りである。ABL:奪格、ABS:絶対格、Adj:形容詞、AdjPt:形容詞的分詞、ALL:向格、DAT:与格、ERG:能格、GEN:属格、LOC:位格、NEG:否定、PL:複数、PRS:現在、PST:過去。アバール語の位格、向格、奪格は5系列の構成要素からなる。系列I、II、III、IV、Vの基本的な意味は、それぞれ、「～の上」、「～の辺り、～の所」、「～(連続的な媒体など)の中」、「～の下」、「～(入れ物など)の中」である。アバール語の全体像に関しては、Uslar (1889)、Bokarev (1949)、Madieva (1980)を参照していただきたい。

1. Sは自動詞の唯一の主要な項である。AとOは他動詞の二つの主要な項で、Aは典型的な他動詞で動作主(Agent)が現われる項であり、Oは典型的な他動詞で被動者(Patient)が現われる項である。
2. zhi-の先行詞を直接的に支配している文がzhi-を間接的に支配していれば、間接の度合は問題にならない。
3. 本稿では、項(argument)と付加語(adjunct)の総称としてアクタント(actant)という用語を用いる。
4. 意味役割やそれに類する概念について詳しくは、Fillmore (1968)、Jackendoff (1972, 1990)、Andrews (1985)とそこであげられている文献を参照していただきたい。

5. 代表的な例をあげると、Jackendoff (1972)は、次のような意味役割の階層を仮定している。Agent>Location, Source, Goal> Theme。また、Foley and Van Valin (1984)は、次のような意味役割の階層を仮定している。Agent> ..> Effector> ..> Locative > ..> Theme > ..> Patient。そして、Bresnan and Kanerva (1989)は、次のような意味役割の階層を仮定している。Agent> Beneficiary > Recipient/Experiencer > Instrument > Theme/Patient > Location。
6. このように仮定することを支持する統語現象がいくつかある。その一つが相互代名詞tsotsa-の分布である。相互代名詞tsotsa-の分布を簡単にまとめるが、詳しくは山田(1998a, 1998b)を参照していただきたい。

S (絶対格) の位置にある名詞句がその他の位置にある相互代名詞tsotsa-の先行詞になることはできるが、その反対に、S (絶対格) の位置にある相互代名詞tsotsa-がその他の位置にある名詞句を先行詞にすることはできない。O (絶対格) の位置にある名詞句がA (能格) およびその他の位置にある相互代名詞tsotsa-の先行詞になることはできるが、その反対に、O (絶対格) の位置にある相互代名詞tsotsa-がA (能格) およびその他の位置にある名詞句を先行詞にすることはできない。A (能格) の位置にある名詞句がO (絶対格) 以外の位置にある相互代名詞tsotsa-の先行詞になることはできるが、その反対にA (能格) の位置にある相互代名詞tsotsa-がO (絶対格) 以外の位置にある名詞句を先行詞にすることはできない。斜格経験者述語節では、被経験者 (絶対格) の位置にある名詞句が経験者 (与格、位格I) の位置にある相互代名詞tsotsa-の先行詞になることはできるが、その反対に、被経験者 (絶対格) の位置にある相互代名詞tsotsa-が経験者 (与格、位格I) の位置にある名詞句を先行詞にすることはできない。

自動詞節のS (絶対格)、他動詞節のO (絶対格)、斜格経験者述語節の被経験者 (絶対格) を文法主語、他動詞節のA (能格) を非文法主語、斜格経験者述語節の斜格経験者 (与格、位格I) を含むそれ以外のアクタントを二次的な文法関係と仮定して、次に示す文法関係の階層(i)に基づいた制約(ii)を用いると、上に示した事実がきれいな形で説明できる。

(i) 主要な文法関係 (文法主語>非文法主語) >二次的な文法関係

(ii) 文法関係の階層で先行詞が相互代名詞tsotsa-より低い位置にあってはならない。

7. Dixon (1979, 1994)、Marantz (1984)、Manning (1996)などでは、Dyirbal語やエスキモー語などで自動詞節のS（絶対格）、他動詞節のO（絶対格）が文法主語であると考えている。

参考文献

- Andrews, Avery. D. (1985) "The Major Functions of the Noun Phrase," in Timothy Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description, Vol. 1: Clause Structure*. 62-154. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bokarev, A. A. (1949) *Sintaksis Avarskogo Jazyka*. Moskva, Leningrad: Izdatel'stvo AN SSSR.
- Bresnan, Joan and Jonni M. Kanerva (1989) "Locative Inversion in Chichewa: A Case Study of Factorization in Grammar," *Linguistic Inquiry*, 20: 1-50.
- Dixon, R. M. W. (1979) "Ergativity," *Language*, 55: 59-138.
- Dixon, R. M. W. (1994) *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fillmore, Charles (1968) "The Case for Case," in Emmon Bach and Robert Harms (eds.) *Universals in Linguistic Theory*. 1-90. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- Foley, William A. and Robert D. Van Valin, Jr (1984) *Functional Syntax and Universal Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Madieva, G. I. (1980) *Morfologija Avarskogo Literaturnogo Jazyka*. Maxachkala: Daguchpedgiz.
- Manning, Christopher D. (1996) *Ergativity: Argument Structure and Grammatical Relations*. Stanford, California: CSLI Publications.
- Marantz, Alec. P. (1984) *On the Nature of Grammatical Relations*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Uslar, P. K. (1889) *Etnografija Kavkaza. Jazykoznanie. III. Avarskij Jazyk*. Tiflis.
- 山田久就 (1998a) 「アバール語の相互代名詞 *tsotsa*-について」『日本言語学会第116回大会予稿集』130-135.
- 山田久就 (1998b) 「アバール語の相互代名詞 *tsotsa*-」『一般言語学論叢』第1号。94-108.

山田久就 (1998c) 「アバール語の再帰代名詞」『日本言語学会第117回大会予稿集』 198-203.